

「インマヌエル」の秘密



ベレーシート

●前回は「ベツレヘム」の秘密について取り上げましたが、今回は「インマヌエル」の秘密について取り上げます。イエシュアの誕生は旧約におけるイスラエルの物語を完成させる出来事であり、神のご計画におけるきわめて重要な出来事です。ですからそこには多くの秘密が隠されています。

●箴言 25 章 2 節に「事を隠すのは神の誉れ。事を探るのは王の誉れ。」(新改訳改訂 3 版)とあります。ここにある「探る」と訳されたヘブル語は「ハーカル」(חָקַר)で、徹底的に調べて、隠された神の秘密を見つけるという意味です。これが神の代理者である王の務めであるとすれば、同じく「王である祭司」として召された私たちもこの使命を理解する必要があります。その使命とは、神の豊かな知恵を、「この世ばかりでなく、天にある支配と権威」に対して、教会を通して示すということです。つまり、神が隠されている秘密を見つけるという使命が教会に与えられているのです。このことにもっと多くの時間と力を注ぐ必要があると信じます。なぜなら、それが私たちの誉れともなるのですから。

●YouTube で「360 年間解けなかった数学の難問を解いた超天才」の動画を見ました。彼は 10 歳の時にその難問を知り、それを解くことが自分の生涯の仕事だと直感しました。やがてそれに挑戦しようとしませんが、勤めていた大学の教授からストップがかかります。なぜなら危険な賭けだからです。しかし、あることから再度チャレンジします。彼はその難問を解くために一人屋根裏部屋にこもりました。そして七年経って突然、答えが与えられたと言います。他にも、数学の難問を解くために結婚もせず、世俗から離れて一つのことに集中したことで、誰も解くことができなかった答えを見つけ出した天才たちがいることを知りました。そのような動画を見ながら、今日、神の隠された秘密を解くことのできる者はだれなのか。特別な神学者なのでしょうか。いいえ、それは**キリストの花嫁**です。花嫁であるキリストの教会はいのちの源泉であるみことばの中に隠されている宝を探すことに、多くの時間を注ぐ必要があると信じます。人を集めるために、あれもこれもしようとする働きに翻弄されることなく、静まって、みことばに隠された神のご計画やみこころを悟って「心燃やされる」教会となれるように、ダビデがしたように、「**ただ一つのことに集中すること**」(One Thing)が必要だと信じます。

●創世記 2 章で、神は人はひとりであるのは良くないとして、人に「ふさわしい助け手」を与えました。その「ふさわしい助け手」とは、「彼と向き合ったふさわしい助け手」(「エーゼル・ケネグドー」עֵזֶר כְּנֶגְדּוֹ)の存在です。「彼と向き合った者」とは名詞の「ネグド」(נֶגֶד)ですが、その語源となる動詞の「ナーガド」(נָגַד)は「解き明かす、示す、告げる」という意味を持っています。そのようなふさわしい助け手としての

特権にあずかっているのは、まさに「キリストの花嫁」の他にはおりません。そのことをキリストの花嫁は自ら悟り、「御国の福音」の秘密を解き明かすためにますます花婿を尋ね求める必要があるのです。それが、旧約聖書のいう「神を愛する」(「愛する」のヘブル語は「アーハヴ」(אַהַב)、そして名詞の「アハヴァー」 אַהַבָּה)が意味していることなのだと信じます。

●今回の主題は「**インマヌエル**」という名前が持っている秘密です。テキストはマタイの福音書 1 章 18～25 節です。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 1 章 18～25 節

- 18 イエス・キリストの誕生は次のようであった。その母マリヤはヨセフの妻と決まっていたが、ふたりがまだいっしょにならないうちに、聖霊によって身重になったことがわかった。
- 19 夫のヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に去らせようと決めた。
- 20 彼がこのことを思い巡らしていたとき、主の使いが夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ。恐れないであなたの妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。
- 21 **マリヤは男の子を産みます。その名をイエス(=イエシュア)とつけなさい。**この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」
- 22 このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった。
- 23 「見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。**その名はインマヌエルと呼ばれる。**」(訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。)
- 24 ヨセフは眠りからさめ、主の使いに命じられたとおりにして、その妻を迎え入れ、
- 25 そして、子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく、その子どもの名をイエス(=イエシュア)とつけた。

●このテキストを読むと、登場する人物はマリヤとその夫ヨセフ(ただしまだ結婚していない許嫁の関係)です。そして主の使い(=御使いガブリエル)です。イエシュアはまだ生まれていません。生まれる前の経緯が記されています。ルカの福音書によれば、御使いはマリヤに対して受胎告知をしています。ですから、マタイ 1 章 18 節では「聖霊によって身重になったことがわかった。」と記されているのです。ここで質問です。「わかった」とありますが、誰がわかったのでしょうか。……

答えは、「マリヤ」です。おそらくそのことをマリヤはヨセフに告げたはずです。ですから、当然、ヨセフは頭を悩ますこととなります。19 節には「夫のヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にしたくはなかったので、内密に去らせようと決めた。」とありますが、これらはどういうことでしょうか。おそらく**ヨセフのマリヤに対する愛と責任感の強さから出たもの**であったと思われる。

●このヨセフの決断の背景には、ヨセフが許嫁のマリヤから「聖霊によって」懐妊したことを聞かされたという前提があります。しかし果たしてそのようなことを誰が信じるでしょう。ヨセフが恐れたのはもっと差し迫った現実的な問題でした。マリヤはヨセフにこのことを伝えたことでいくら心が軽くなったに違いありませんが、逆に、ヨセフは大きな重荷をかかえることになったのです。ここでヨセフについてスポットを当ててみたいとなりますが、ここはじっと我慢したいと思います。というのは、ヨセフという人物

にスポットを当てると、そこにも神の隠された秘密があって、話が大きくずれていくことになります。ですから、ヨセフのことは別の機会に扱いたいと思います。

1. ヨセフに対する御使いの告知

20節 彼がこのことを思い巡らしていたとき、主の使いが夢に現れて言った。

「ダビデの子ヨセフ。恐れなくてあなたの妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。」

●恐れの中にあつたヨセフのところに御使いが現れます。何と「夢に」です。そうした例は他にもあります。例えば、幼子イエシュアを礼拝にしにきた東方の博士たちが、夢でユダの王ヘロデのところに戻るなという戒めを受けています。しかし不思議なことに、ヨセフに対してのみ御使いはすべて夢の中で現われ、そして語っているのです。ちなみに、マタイの福音書ではこの後、御使いが三回にわたってヨセフに現われます(2:13, 19, 22)。そのすべてが夢の中で語られるのです。しかも主の使いがヨセフに一方的に語るという点でも一貫しています。祭司ザカリヤにしても、マリヤにしても、羊飼いたちにしても、主の使いが現われています。しかしそれは夢の中ではなく、みな目に見える形で現われているのです。使徒ペテロに対しては、御使いはわざわざ寝ている彼を起こして語りかけています(使徒 12:7)。それなのになぜヨセフだけが特別に夢の中なのでしょう。謎です。「夢見るヨセフ」・・明らかにそこには神の秘密が隠されているのが分かります。しかし今回はそのことに触れないでおきます。

●いずれにせよ、ここで重要なことは、ヨセフが主の使いのことばを信じて、素直に、即座に、従ったという事実です。ヨセフに対する主の使いのことばは、「恐れなくてあなたの妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。」でした。到底、理性では理解出来ないことをヨセフはそのまま受け入れたことは驚くべきことです。マリヤに勝るとも劣らないヨセフの神への信頼、信仰の姿勢のすばらしさにあらためて感動させられます。イエシュアはこの敬虔な両親に育てられることによって、律法が要求していることを完全に満たしたことで、傷のない生涯を送ることが可能となったのです。もし両親がいい加減な親であったなら、「傷なき生涯」を送ることは不可能でした。ここにも神の驚くべき配慮を見ることが出来るのです。

2. 「主の使い」が語った幼子の名前は「イエシュア」

●主の使いが現われることで、マリヤが聖霊によってみごもったことをヨセフは再確認させられることになりました。そして、御使は生まれてくる男の子の名を「イエス」と名づけるように命じます。「イエス」という呼び名はギリシア語の「イエスース」(Ἰησοῦς)から来ています。英語では「ジーザス」(Jesus)ですが、ヘブル語では「イエホーシュア」(יְהוֹשֻׁעַ)の短縮形の「イエーシューア」(יֵשׁוּעַ)となります。なぜそのような名前をつけるように命じたのでしょうか。それを知るためにはヘブル語の「イエシュア」

という名前の意味を知る必要があります。「イエスス」や「ジーザス」という呼び名からその意味を知ることはできないからです。

●「イエシュア」(「イエーシューア」**יֵשׁוּעַ**)は「主は救い」を意味します。モーセの後継者ヨシュアのヘブル語の綴りは「イエホーシュア」(**יְהוֹשֻׁעַ**)ですが、「ホー」(**הוּ**)の部分ほとんど聞き取れないので「ヨシュア」と聞こえてしまいます。ヘブル人への手紙 11 章に旧約の信仰の勇者たちが登場しますが、ヨシュアの場合は省略されています。なぜなら、ヘブル書が仰ぎ見るように強調されている「イエシュア」と間違えられることを避けるためです。

●旧約時代において、モーセはイスラエルの民をエジプトから救い出し、ヨシュアは神の約束の地へと導きました。イエシュアの名前がヨシュアと同じ意味であるということは、神の約束を実現させるために、歴史をもう一度踏み直すという意味が込められているのです。ですから、御使いはヨセフに「この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」と教えたのです。ご自分の民とは、「イスラエルの民」のことで

す。彼らは当時、本来のあり方から的はずして(=これが罪)、神の救いのご計画を担う民ではなくなっていたのです。ですから、その結果、彼らは異邦人の支配下に置かれていました。イエシュアはそうした状況から彼らを救い、解放するために来られたのです。つまり、彼らを救って本来の目的にかなった民とするためです。そしてそのことは神の永遠のご計画を実現するためでもあったのです。

キリストによる踏み直し	
イスラエルの歴史	イエスの生涯
(1) 出エジプトの出来事	(1) マタイ2章15節
(2) 紅海徒渡	(2) イエスの受洗
(3) 荒野の放浪(40年間)	(3) 荒野の試練(40日間)
(4) モーセの五書(トーラー)	(4) 五つの説教(マタイ)
(5) 失敗の歴史	(5) 罪なき生涯
(6) バビロン捕囚と解放	(6) 十字架の死と復活

※【新改訳改訂第3版】**マタイの福音書 2章 15節**・・・この箇所は、出エジプトを完結するという意味があります。ヘロデが死ぬまでそこにいた。これは、主が預言者を通して、「わたしはエジプトから、わたしの子を呼び出した」と言われた事が成就するためであったとあります。つまり、踏み直しがはじまったのです。

3. 「インマヌエル」という名の意味

22 このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった。

23 「見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」

(訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。)

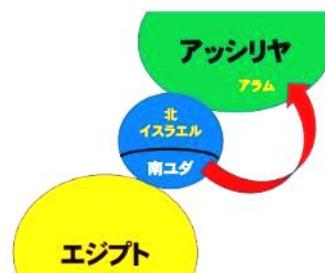
●22～23 節のことばは、御使いが語ったことばではありません。御使いが命名した「イエシュア」という名に加えて、このイエシュアは「インマヌエル」とも呼ばれると、マタイが記しているのです。つまり、処女受胎によるイエシュアの誕生は、「主が預言者を通して言われたことが成就するため」の出来事であり、神のしるし(=サイン)であると語っているのです。この預言はイザヤ書 7 章に語られています。そこに記

されている歴史の舞台は、イエシュアが生まれる七百年前に遡ります。その時代はまだ北イスラエル王国と南ユダ王国があった時代です。南ユダ王国ではアハズ王が治めていた時代です。アハズ王は、教会学校でも学んでいるように、まことの神に頼らずに大国アッシリヤの王に信頼しようとした王でした。

● 「インマヌエル」という呼び名は、イザヤ書 7 章にあるように、当時のユダの王アハズに語られたもので、神は信頼に足るお方であることを、神自らあかしするひとつのしるしとして付けられた呼び名です。この呼び名は「神は私たちとともにおられる」という意味です。『インマヌエル』は、ヘブル語で「インマヌー」と「エール」からなる合成語です。「インマヌー」(יְהוָה)は、「ともに」を意味する前置詞の「イム」(עִמָּךְ)に、「私たち」という人称語尾「ヌー」(נִי)がついた語です。つまり、「インマヌー」(יְהוָה)で「私たちとともに」という意味になります。それに「神」を意味する「エール」(אֱלֹהִים)が組み合わさって、「神が私たちとともに(おられる)」という意味になります。これは、「**神性と人性が共にある存在**」という意味です。神と人とが一つになったユニークな存在、そのユニークな存在であることを示す神からの「しるし(サイン)」は、「処女から産まれる男の子(単数)」ということなのです。つまり、「処女から産まれる男の子」イエシュアは、「神と人とがともにある存在」という意味で、「インマヌエル」と呼ばれるのです。「イエシュア」という方は「インマヌエル」そのものなのです。この「インマヌエル」と呼ばれる方を信頼するというかわりを通して、はじめて神が私たちとともにいてくださるということが可能となるのです。

4. 「インマヌエル」の預言の歴史的背景

● 「インマヌエル」の預言がなされた歴史的背景を知るならば、この名前の意味がより深く理解できます。イエシュア誕生の約七百年前、アッシリヤが一躍世界の大国(覇者)となったとき、それは中東の地域に大きな脅威をもたらしました。アッシリヤと隣接するアラムと北イスラエル王国は反アッシリヤ同盟を結び、南ユダ王国のアハズにも同盟を呼びかけました。ところがユダ王国のアハズ王は、「寄らば大樹の陰」でその呼びかけを断りました。そのことで、反アッシリヤ同盟軍が押し寄せて来るという情報が伝えられました。そのときの状況をイザヤ書 7 章節では次のように記しています。



【新改訳改訂第3版】イザヤ書 7 章 1~2 節

- 1 ウジヤの子のヨタムの子、ユダの王アハズの時のこと、アラムの王レツィンと、イスラエルの王レマルヤの子ベカが、エルサレムに上って来てこれを攻めたが、戦いに勝てなかった。
- 2 ところが、「エフライムにアラムがとどまった」という報告がダビデの家に告げられた。すると、王の心も民の心も、林の木々が風で揺らぐように動揺した。

● 1 節は、これから述べることの結論が記されています。つまり、「アラムの王レツィンと、イスラエルの王レマルヤの子ベカの同盟軍がエルサレムに上って来てこれを攻めたが、戦いに勝てなかった。」という結論です。時間軸としての流れは 2 節からです。「エフライム」は北イスラエル王国の別名で、そこアラム

が同盟を結んだことを「エフライムにアラムがとどまった」と記しています。その報告が「ダビデの家」、つまり南ユダ王国に知らされたのです。この時の様子を次のように伝えているのです。「すると、**王の心も民の心も、林の木々が風で揺らぐように動揺した。**」と。L.B 訳ではこの箇所を、「王も民も震え上がり、暴風にゆさぶられる木々のおののきました」と恐れによる動揺の強度を最大限に訳しています。

●そこで主は、預言者イザヤを遣わしてアハズにこう言います。「**気をつけて、静かにしていなさい。恐れではありません。・・・心を弱らせてはなりません**」と。そして、たとえ同盟軍が襲って来たとしたとしても、彼らが言うようなことは「**起こらないし、ありえない。**」と語り、同盟軍の滅亡を告げます。つまり、同盟軍の悪事の企ては決して実現しないし、そんなことは「ありえない」と語ったのです。つまり、そのようなことは神のご計画の中にはないということです。ですから、まさにこの「**ありえない**」という断言的フレーズは、「恐れ」を締め出すすばらしいことばなのです。ぜひ覚えましょう。ヘブル語で「**ロー・ティフイエ**」(**לֹא תִּיְהִי**)と言います。ちなみに、「ロー」(**לֹא**)は強い否定を表し、「ティフイエ」(**תִּיְהִי**)は「ある」を意味する「ハーヤー」(**יָרָא**)の未完了形です。「**ありえない**」=「**ロー・ティフイエ**」のです。

●預言者イザヤは、アハズに対して、神を信頼することによる「静けさ」への招きに答えることができるように次のように提案しました。「**あなたの神、主から、しるしを求めよ。よみの深み、あるいは、上の高いところから。**」(7:11)と。このフレーズの後半のことば「よみの深み、あるいは、上の高いところから」という意味は、たとえどこであっても、神が与える「静けさ」を請け負うという神の決意の表明です。「よみ」とは、ここではアッシリヤやエジプトを表わすメタファー(隠喩)です。それゆえ 11 節のことばは、強国アッシリヤやエジプトのような人間的な力に信頼するか、それとも高い天に住む神に信頼するか、その選択の決断を迫るものでした。

●ところがこの提案に対して、アハズは「私は求めません。主を試みません。」と答えます。一見これは信仰深い人の反応のように見えます。しかしそれを聞いた預言者イザヤは、「さあ、聞け。ダビデの家よ。あなたがたは、人々を煩わすのは小さなこととし、私の神までも煩わすのか。」とアハズを非難しています。アハズがしるしを求めない真意は、すでに彼がアッシリヤの軍事力に依存して、危機を乗り越えようと決意していたからでした。これは神をないがしろにする行為だったことは言うまでもありません。神によって存在している民が、神ではないものに依存しようとしたからです。

●預言者イザヤがアハズに語ったことは、どんなときにも、神を信頼せよということでした。アハズは神が支配する国の王であったにもかかわらず、危機的な状況において、神を信頼する事ができませんでした。王が信頼できなければ、その民も信頼できなくなります。王の心も民の心も「林の木々が風で揺らぐように動揺した」のは、人間の根源的なニーズである生存と防衛の保障において、神を信頼する事ができなかったことにあります。信頼すべき確かなしるしとして神自ら与えるしるし、これこそ 7 章 14 節にある「インマヌエル預言」です。この預言は、人間の深いところにある生存と防衛を脅かす「恐れ」から解放する神の永遠の保障としての「しるし」なのです。「見よ。処女がみごもっている。」というしるしは、現代の科学的知識に洗脳された者たちには、「ありえない」とつまづかれます。しかしそのことをまともに信じる

者にとっては、多くの恐れに支配されることは「ありえない」こととなるのです。

●神の忠告は「信じなければ、あなたがたは確かにされない」ということです。つまり、「神のことに立って自分を確かにしなければ、確かにされない」という意味です。アハズに求められた「静けさ」は人間が作り出せる落ち着きではなく、神からくる「静けさ」(安心による心の平穏さ)です。これは信仰による奇蹟と言えます。

●ちなみに、アハズの子であるヒゼキヤの時代に、アッシリヤの王セナケリブによるエルサレムの包囲がありました(B.C.701年)。アッシリヤの18万5千人の軍勢に取りかこまれたのです。そのときにもイザヤは、「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。」(イザヤ 30:15)と語っています。人間の思いや計算に立たずに、神に信頼するとき、神が立ち上って、敵を蹴散らし、事態を乗り越えさせてくださるのです。イザヤが説く「静けさ」は神から来る力です。

5. 神の民の罪を救うとは

●神の民の罪とは、このようにアハズに代表される神への「不信の罪」です。神を信頼しない罪、この結果、やがて南ユダ王国の民はアッシリヤの後に台頭してくるバビロンによって国を失い、捕囚の身とされます。70年後にバビロンから解放されますが、それからというもの、ペルシャ、ギリシア、ローマによって支配され続けることとなります。そうした異邦の諸国の支配から救うために、神は御子イエシュアをお遣わしになりました。またその方は、神の確かな救いの「しるし」としての、イザヤが預言した「インマヌエル」と呼ばれる方です。残念ながら、今日の多くのユダヤ人はこのことを信じていません。

●かつて、ユダの王アハズとその民が神を信頼できなかったばかりに、攻めて来るアラムと北イスラエル(エフライム)の軍勢に対して、恐れゆえに、「林の木々が風で揺らぐように動揺」しました。預言者イザヤのいう「静かにしていなさい。恐れてはなりません。」という神からのメッセージを受け取ることができなかったのは、袖の下を使ってアッシリヤに援助を求めたからでした。この不信の罪こそ、神に対する罪の中で最も大きい罪です。神がご自身を現わされる民として選ばれたにもかかわらず、神の言われることに信頼できない罪こそ、イスラエルの神の民が犯した罪であり、神の民だけでなく、すべての人間が持っている罪なのです。神はこのような現実の中に、再び、神を信頼できる道を造るために、「インマヌエル」という最後の切札をお遣わしになりました。もし、私たちがこの方を信じられなかったとしたら、もう救いの切札はありません。言い換えるなら、「インマヌエル」と呼ばれるお方、イエシュアこそ、私たちの生存と防衛を保障するに唯一の希望であり、永遠のいのちを与えて、永遠に神とともにあることを実現して下さる確かな光なのです。

2016.11.20